

サーチライト With Pastor Jon 黙示録 第3章 パート1

.....

このメッセージはアップルゲート クリスチャン フェローシップの、ジョン・コーソン牧師が公開したメッセージを、アメリカ在住の日本人クリスチャン木下言波が翻訳して YOUTUBE やブログに上げたものを文字化したものです。世界的なインターネット規制が始まろうとしています。私達はその日のために、文字にして紙に記録するのを感じました。また、インターネットに不慣れな方や字幕を追って読むのが困難な方のためにも必要があると主に迫られたと感じます。

※インターネットのメッセージを、文章化するこの働きを始めた姉妹が、現在目を患って治療中です。どうか、りょくさんの為にも、お祈りください。

「きょう、もし御声を聞くならば、あなたがたの心をかたくなにはならない。」

ヘブル4:7

メッセージ by ジョン・コーソン牧師 アップルゲート クリスチャン フェローシップ

<http://joncourson.com/>

7590 Highway 238 Jacksonville, OR 97530

訳 by 木下言波 DivineUS : <https://www.youtube.com/user/TheDivineUs>

筆記 by Rin

サルデスにある教会の御使いに書き送れ。(黙示録 3:1)

これまで学んできたエペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラの名前は、それぞれが示す教会史の時代背景に、驚くほどピッタリと当てはまります。

今回のサルデスの意味は『名残り・残骸』

サルデスは、非常に裕福な町でした。

そして、これが今回のポイントですが、この町はとても傲慢で高ぶっていました。

誰にも陥落させられることはない、永遠に強い状態で存続し続けると信じていました。

ところが、町は想像を絶するほど繁栄していましたが、勢力を増し加えていたペルシャのクロス王が、BC549年に攻め入り、サルデスは陥落したのです。びっくりします。

更に驚くのは、常識からすれば、歴史から何かを学ぶものだと思うのですが、大変に傲慢なこの町は、BC549年にそのような事があったにも拘らず、約300年後のBC214年に、全

く同じ事を体験するのです。

歴史から学べるただ一つのは、“人間は、決して歴史から学ばない”ということ。

これが、今日のメインになります。

これは、イエスが誕生する前のサルデスの歴史ですが、イエスはそのことをほのめかしています。

また、サルデスにある教会の御使いに書き送れ。『神の七つの御霊、および七つの星を持つ方がこう言われる。(黙示録 3:1)

1章でキリストを形容した表現はすべて、2章・3章の、それぞれの教会へのメッセージにも繰り返されています。どうして、この表現なのでしょう。

私が個人的に思うのは、“七つの御霊”とは、七つの異なる聖霊ではありません。

聖霊は一つです。

イザヤ書 11章 2節には、御霊には七つの性質があると書かれています。

イエスは、これは、七つの性質がある聖霊を持っている者からのメッセージだと言っているのです。

どうして、この事を言うのでしょうか。

それは、伝統的な主流派プロテスタント教会は、聖霊に関する教えを激しく批判してきたからです。

最近、幾つかの主流派プロテスタントグループは、同性愛者の聖職者たちやレズビアン同士の結婚など、そういう類のことはオープンになり受け入れています。

しかし彼らは、聖霊に関しては、今でも非常に批判的です。

そんな主流派プロテスタント教会を震撼させるもの、それは、異言や癒しの奇跡。

彼らは、それをひどく恐れるのです。

と言っても、大部分がそうであって、全部というわけではありません。

中には、とてもとても、もう1回言いますが、とても素晴らしい主流派プロテスタント教会が存在します。ルター派・長老派・メソジスト派・会衆派などなど、伝統的で素晴らしい働きをしている教会。

しかし、残念ながら、その大半はサルデスの道に追従しています。

素晴らしいカトリック教会や司祭がいる中で、世界中のカトリック教会のほとんどがそうであると同様に、彼らはイエス・キリストを教えず、羊を養っていません。

あまりにも多くの教会が、カトリックはテアテラのイゼベル思考、プロテスタントはサルデス症候群に陥っているのです。

「わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、生きてるとされているが、実は死んでいる。」(黙示録 3:1)

イエスはサルデス教会には、何ひとつ褒める言葉を与えませんでした。

これは、私にとっては恐ろしいことです。

あれだけ警告を受けたテアテラ教会でさえ、19節(2節)で褒められました。

けれども、ここサルデス教会では、

「わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、生きてるとされているが、実は死んでいる。」(黙示録 3:1)

とても面白いことに、この“生きてるとされているが”は、原文のギリシャ語では、“ONOMA”(オノマ)で、“名前”という意味。

これは、“宗派”という意味にも使われます。

「あなたがたには名前がある。」

「確かに。私たちは、ルターに従う者でルター派だ！」

「私たちは、ジョナサン&チャールズ・ウェスレーに従う者で、メソジストのウェスレー派だ！」

「私たちは、カルバン派！」

「長老派！」

彼らには名前があって、“宗派”を誇っています。

でも、イエスは言いました。「あなたがたは、死んでいる。」

つまりこういう事です。

今夜、外に出て夜空を見上げ、北極星を見ます。「あの星を見てごらん。キラキラ輝いて本当にきれい！」でも、それが、いつまでもそこに存在するとは限らない。

その北極星は 33 光年先にあって、仮に 32 年前にその星が消滅していたとしても、翌年になるまで私たちには分からない。

現在、私たちが見ている北極星は、33 年前に光を放ったけど、今はもう存在しない可能性も大いにあるのです。

「あの星を見てごらん。」でも、その星は、もう既に存在していないかもしれない。

同じように、その集団、このグループ、あの宗派…

主は言います。「名前はあるが、存在しない。」

「確かにあなたがたは、とてつもなく偉大で、ものすごいブームを起こした。素晴らしい名前を持っている。しかし、もう存在しない。それは幻だ。あなたがたは伝統にあぐらをかいて、わたしと関係を持とうとせず、実際、個人的で親密な関係を築いていない。」

もし、皆さんが評判や歴史、伝統にとらわれているなら、「あなたがたに名前・宗派はあるが、死んでいる。

「目をさましなさい。」(黙示録 3:2)

主は3節でも繰り返して言われます。

「目をさまさなければ、」(黙示録 3:3)

どうして、サルデス教会は、目をさましていなければならなかったのでしょうか。

それは、人々が注意を怠った時、「我々は無敵だ。誰もこの町に攻め入る事なんてできやしない。」と言っている時に、町が陥落したからです。

「傲慢と高ぶりの中で、あぐらをかいていたあなたがたの町が陥落した。その歴史から学びなさい。」とイエスは言われます。

「目をさましなさい。そして、死にかけているほかの人たちを力づけなさい。わたしは、あなたの行ないが、わたしの神の御前に全うされたとは見ていない。」(黙示録 3:2)

「だから、あなたがどのように受け、また聞いたのかを思い出しなさい。

それを堅く守り、また悔い改めなさい。」(黙示録 3:3)

初めに何を受けたのでしょうか。それは、聖書です。

御言葉に戻りなさい！

「最初にどのように受け、聞いたのかを思い出しなさい。」

「離れてしまった基本に戻って、悔い改めなさい。」と主は願っています。

“ジーザス・セミナー”は、主流派プロテスタントの神学者たちによる会議です。

彼らはパイプを吹かしながら、難しい神学の専門用語を並べ立て、イエスが、本当は何を言ったのかについて議論しました。

だが残念なことに、“ジーザス・セミナー”は、主流派プロテスタント教会の問題になってしまったのです。

ヨハネやマタイ、ルカ、マルコが書き記したことを、イエスは本当に言ったのか。

これを延々7年間議論した挙句、彼らが出した結論は、「イエスの言葉とされているものは、一つの言葉以外は、すべて、福音書の著者によって作り上げられたものである。」

驚愕！

そのたった一つの御言葉とは、

「受けるよりも与える方が幸いである。」(使徒の働き 20:15)

彼らがイエスの言葉として認めたのは、唯一これだけ！

それで言った事が、「イエスは、他でもないこの事を言っているのです。我々のセミナーに献金し続けて下さい。」

これは権力であり、あり得ない事であり、神の目にはとんでもない罪であって、ローマの教会が不品行によって血を流した罪よりもはるかに重い。

これらプロテスタント教会の主流派たちは、自由主義に走り、自分勝手に解釈しただけでなく、信者の中にあるシンプルなキリストの御言葉さえも蝕んでいったのです。

「だから、あなたがどのように受け、また聞いたのかを思い出さない。

それを堅く守り、また悔い改めなさい。

もし、目をさまさなければ、わたしは盗人のように来る。

あなたには、わたしがいつあなたのところに来るか、決してわからない。」(黙示録 3:3)

ここ！チェックして下さい。よく聞いて。

「もし、あなたが目をさましていないなら、基本に戻らないなら、わたしは盗人のように来る。あなたには、わたしがいつあなたのところに来るか、決してわからない。」

これは、どういう意味でしょう。“盗人”で何か気付きませんか。

第1テサロニケで使徒パウロは、携挙について語った後、こう言っています。

兄弟たち。それらがいつなのか、またどういう時かについては、あなたがたは私たちに書いてもらう必要がありません。

主の日が夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです。

人々が、「平和だ。安全だ。」と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。

しかし、兄弟たち。あなたがたは暗やみの中にはいないのですから、その日が、盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。(第1テサロニケ 5:1 - 4)

この“襲いかかる”とは、信じていない人たち、目をさましていない人たちへの言葉で、正に、主流の宗派を重んじる人たちに対する言葉です。

彼らは、携挙も千年王国も信じておらず、王国に関する約束も、イザヤ書の偉大な預言も、黙示録の教えも、全てただの物語に過ぎません。

「学びはするけど、物語なんだから、それを文字通りに受け止めてはいけない。

携挙を待ち望むな。地上で千年王国が設立するなんて信じてはいけない。

そんなことは起こらないから。」

彼らは信じていない。

だからイエスは、このような人たちに「目をさましていなさい。」と言ったのです。

では4節。

「しかし、サルデスには、その衣を汚さなかった者が幾人かいる。」(黙示録 3:4)

このサルデス教会及び、サルデス時代の教会は、AD1500年からですが、ところで、最後の四つの教会は、千年王国到来までの時代を象徴しています。

イエスはそれぞれに、再臨・患難・携挙について話していて王国到来まで続くのです。

「彼らは白い衣を着て、わたしとともに歩む。彼らはそれにふさわしい者だからである。勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。」(黙示録 3:4 - 5)

あなたが、彼らのように自由主義に走り、真理を否定するようなことをしなければ、

「そして、わたしは、彼の名をいのちの書から消すようなことは決してしない。」

(黙示録 3:5)

「ちょっと待って下さい。つまりヨハネは、いのちの書から名前が消される可能性があると言っているのでしょうか。」

イエスがこう言っているのです。

「もしあなたが勝利を得るなら、彼らに追従しないなら、わたしは、彼の名をいのちの書から消すようなことは決してしない。わたしは彼の名をわたしの父の御前と御使いたちの前で言い表す。」(黙示録 3:5)

「ジョン先生、あなたは永遠の保証を信じていないのですか。」

私自身に関しては信じています。でも、あなたに関してはわかりません。

私自身は、永遠の保証を得ていると信じています。

「だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。」(ヨハネ 10:28)

私は大丈夫。それは、私自身を主に捧げたからです。

主は、主に全てを捧げた者を、その日まで保つことができる方だと分かっているからです。

だから、私は永遠が保証されている。

でも、あなたがどうだか、私にはわかりません。

第1コリント6章、エペソ5章、ガラテヤ5章、コロサイ3章、そして今見ている黙示録3章。

あなたがたは、正しくない者は神の国を相続できないことを、知らないのですか。

だまされてはいけません。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、

男娼となる者、男色をする者、盗む者、食欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者はみな、神の国を相続することができません。(第1コリント 6:9 - 10)

神は、これらの御言葉を通して前もって言われました。

もし人が、「聖書に何が書いてあろうと関係ない。」「主が何を言おうが構わない。」「私はやりたいことを、やりたい時に、やりたい人とやるだけ。どうなったって構わない。自分のやり方でやる。」と言いながら、不品行をし続けることを選び取るなら、主は、「常に罪を犯し続ける者は、王国を相続することができない。」「誰にもだまされないでいなさい。」と言われます。

「つまり、永遠の保証を信じないということですか。」

信じません、あなたに関しては。

もしあなたが、知っていながら意図的に罪を犯し続けるなら、悔い改めて方向転換し、それらから離れる事を拒否するなら、そうすることを選ぶなら、第1コリント6章、エペソ5章、ガラテヤ5章、コロサイ3章、黙示録3章のメッセージは明白。

誰でもサルデス教会のように高慢になるなら、「気をつけなさい！」と主は言われます。

「わたしは、勝利を得る者の名をいのちの書から消すようなことは決してしない。」

「それで、永遠の保証を信じていないのですか。」信じていません。

「信じていると思っていました。」信じていますよ。

「ということは、つまり信じている？」はい。

「混乱してきました。」そうですか？

もし誰かが罪のことで思い悩んで私の所へ来たら、私は“良い知らせ”を伝えます。

「主はすべてをご存知ですよ。」

すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。(ヘブル4:15)

キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。(ローマ8:1)

正直に心開き、打ち砕かれて罪を告白した人には、

「あなたはもう赦されている。あなたの罪は、もう忘れ去られている。大丈夫だ！」

しかし別の人に来て、

「あなたがどう思おうと構わないし、何を言われても関係ない。これを止めるつもりはないし、あなたとは無関係だ。」

と言うなら、こういう人には別の御言葉を伝えます。

第1コリント6章、エペソ5章、ガラテヤ5章、コロサイ3章、黙示録3章から、

「もしそれが本心なら、もし罪を犯すことへの悲しみもなく、悔い改めもせず、高ぶりの中で何年も何十年も罪を犯し続けるなら、あなたには永遠の保証はない。」

主は言われました。

「サルデスの人たち、気をつけなさい。もし悔い改めず、基本に戻らないなら、いのちの書から名前を消す。」

「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」(黙示録 3:6)

それでは、私たちはどうすれば良いのでしょうか。率直に思うところをお話しします。

以前ヨーロッパに行った時に入った大聖堂は、非常に見事な、それはそれは美しい主流派プロテスタントの教会でした。

ヨーロッパには、宗教改革時代に建てられた素晴らしい教会が、そこかしこにあります。確かにその時代には、真の大リバイバル、宗教改革、信仰復興などの良いことが起こりました。

しかし、年月が経つにつれ彼らは“名前”に頼り始め、そして死んでいったのです。

伝統に依存する。それは現実のものではありません。

それが、宗教がもたらす問題なのです。

主に触れられた人、ウィクリフであれ、ルター、カルヴァン、その他だれであっても、神がその人を動かしてミニストリーとなりますが、関連するミニストリーには、どこも必ず同じパターンが生じていることが分かります。

本当のことを言えば、教会史や聖書を学んで分かってくるのは、全ての世代が自分自身の宗教改革、リバイバルが必要だということ。

それぞれの世代が聖霊に触れられ、イエス・キリストへの愛を、情熱の炎で燃え上がらせなければなりません。

次世代の人たちは、お父さん、お母さんの時代がどうであったか話を聞くだけではダメなのです。自分自身が体験しなければならない。

そして神が、彼らを通して計画されている事を表現すべきなのです。

今までとは全く違うかもしれません。

ここに座っている世代にとっては、この礼拝堂も、全然ふさわしくないと思うかもしれません。

だけど、神は既に新しい世代に働きかけていて、彼らは立ち上がっています。

彼らは、私たちが行ってきた事とは全く違う方法でやっていくでしょう。

「何やってるんだ!?!」「何てことだ!」と言いたくなるかもしれません。

皆さん、そこにいる若者たちを見て下さい。

彼らこそ、神が育てておられる次世代なのです。

主を愛し、御言葉の上に立つ若者たちを見ていると、私はワクワクします。

私たちは、主が彼らと共に、彼らを通してなされる御業を見て喜ぶべきであって、「私たちのようにやりなさい。これが伝統だ。」と押し付けてはなりません。

この建物は道具の一つに過ぎず、次世代にはそれほど重要でなくなっていくのです。新しいことが始まっているのですから。新しい世代に、新しいこと、素晴らしいことが起こっていきます。

そのためには私たちが、自分の時代のやり方から退き、この建物にはこだわらないこと。これは、ただの道具だから。

どのミニストリーも、その時代の道具や手段に過ぎないから。

使える限りは使えばいい。でも、もう使わないならドアを閉め、いらぬものは売ってしまう。そして退くのです。

私個人の意見ですが、この辺りのほとんどの教会が、**50**年前に手放すべきだったものを未だに抱え込んでいます。使える内は使い、いらなくなったら手放す。

私たちのように髪に白髪が混じり始めた世代にも、そんな時代があったじゃないですか。

40代、**50**代、**60**代の皆さん、「わたしの出番はどこだ？」なんて言わないで。

あなたは逃がしたんですよ、本当です。「私だって、まだまだこれから！」とか言わないで。

次の世代を育てましょう。それが鍵です。

これからは「主よ。**3**歳、**5**歳、**10**歳、生後**2**ヶ月でも、次の世代をあなたの御心のままに、あなたの道具として用いて下さい。」と言って一步引き下がろうではありませんか。

勿論、主がすぐにも来られると信じています。でも、そうでない時のためにも備えておくのです。

毎日、主が来られることを楽しみに待ち、早く戻って来られるようにと望んでいます。

それでも、もし私が、再臨に関してはっきり知るべきしるしを見逃しているとしたら、そしてまた、次の世代まで、まだ時間が残されているのなら、彼らにも準備を整えてほしいのです。

そうすれば、若者たちも私たちと同じ喜びを味わうことができます。

そのためなら、私は喜んで彼らの踏み台になります。

要するに、私たちの伝統は永続させるものではないということ。

私たちの機械を保管し続けるのではなく、それらを使用し、もう効果的に使えなくなったら手放す。

そして、主が備えて下さっている新しい方法を用いる。これが秘訣です。

新しいぶどう酒を古い革袋に入れてはいけません。

神は本当に優しく、個人や伝統や出来事を、記念碑のように残したがるという人間の傾向をよくご存知です。

「60年代のジーザス・ムーブメントはよく覚えているよ。」

勿論イエスもそうですよ。そこにいたのですから。

いいですか。いつまでも60年代に憧れてはいけません。

私も当時はその中にいたし、実際とても素晴らしかった。でも、今の時代はもっと素晴らしい。そして、これから来る時代は、更にもっと素晴らしいのです。

なぜなら、パウロが言うように、神の御心は、栄光から更なる栄光へと移っていくことだから。

私たちが一步退き道を開けるなら、主は前を進んで行かれます。

伝統にしがみついてはいけません。

それはサルデス症候群です。気をつけましょう。

次の世代は、彼ら自身が自分の救いを懸命に求め、見つけ出していきます。

皆さん、私たちクリスチャンは王国の子供で、イエスに在っては兄弟姉妹、神の家族。

だから、私たちは彼らに拍手を送り、支え励ますのです。

サルデス症候群に陥らないように、主の恵みと憐みによって、ここで教会として心を決めましょう。

主よ。私たちをお守り下さい。あなたの恵みが私たちの上にありますように。

主の御名によって。アーメン。

つづく

翌日、彼らがベタニヤを出たとき、イエスは空腹を覚えられた。

葉の茂ったいちじくの木が遠くに見えたので、それに何かありはしないかと見に行かれたが、そこに来ると、葉のほかは何もないのに気づかれた。いちじくのなる季節ではなかったからである。

イエスは、その木に向かって言われた。「今後、いつまでも、だれもおまえの実を食べることのないように。」弟子たちはこれを聞いていた。(マルコ 11:12 - 14)

朝早く、通りがかりに見ると、いちじくの木が根まで枯れていた。

ペテロは思い出して、イエスに言った。「先生。ご覧なさい。あなたののろわれたいちじくの木が枯れました。」(マルコ 11:20 - 21)